

最新事情

庄原を拠点に、世界を相手に
頑張れる人材を育てたい

広島県立庄原実業高等学校

(広島県庄原市)

広島県立庄原実業高等学校は、明治41年の開校で100年以上の歴史を誇る。学科は生物生産学科、食品工学科、環境工学科、生活科学科の四つ。どの学科でも実習や体験学習を多く取り入れ、実践力を身に付けた人材を育成している。サービス接遇検定を導入している生活科学科の取り組み内容を中心に、学校全体の特徴的な教育について伺った。

努力をすれば、 望み通りの結果が出る

広島県北部にある広島県立庄原実業高等学校は、明治41年に比婆郡立実業高校として開校した。時代の変化や地域の要請により、学科の改編を繰り返して、現在は生物生産学科、食品工学科、環境工学科、生活科学科の四学科を擁する。「質実剛健。飾り気がなく真面目で、たくましい。そしてしっかりしている。これが本校が育てたい人材です」と力を込めて話すのは、八幡茂見校長だ。平成28年度に赴任したばかりだが、実業教育に対する思いは強い。

「農業専門高校として、生命体の育成を基盤とした教育活動を展開し、未来を切り拓く感性豊かな人間形成教育を進め、社会で通用する人材の育成と、農業高校拠点校として教育活動を推

進する。これが本校の大きな目標です。『庄原実業高校で学んでよかった』と生徒が思い、将来はここ庄原を拠点に世界を相手に活躍してもらいたい。そうした願いを込めて、教育に取り組んでいます」。

同校は平成27年度から、文部科学省の「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）」に指定され、特長ある指導に取り組んでいる。この取り組みの中で興味深いのが、「地域農業探究」という学校設定科目だ。全学科1年生の基礎科目でもあるこの授業は、庄原で学んでいる生徒が地域を深く理解して誇りを持ち、さらにこの地域を好きになり、将来はこの地域の担い手になることを期待して導入された。

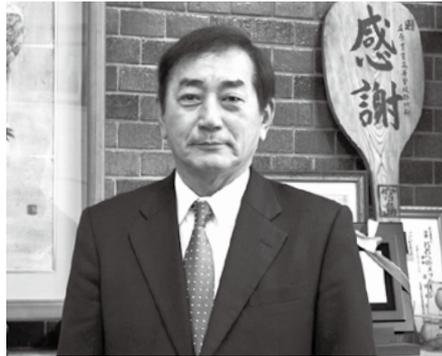
同科目の核となるのが「フィールドリサーチ」。地域資源を生かし、先進的な取り組みを行っている人や、文化や芸術で活躍する人を取り上げて研究し、まとめ、発表を行う。

「庄原市を複数の地域に分け、4〜5名のグループでフィールドリサーチを実施します。調査先は学科によって異なります。例えば、生物生産学科は地域の指導農業者の方から話を聞いて、農業の実情や今後の方向性について調査。環境工学科では、ダムや土木施設などについて調査しました。

調査してまとめる実習に当たっては、新聞記者やカメラマンを講師として招き、インタビューや撮影の仕方などを指導していただきました。各分野で活躍するプロの話は、生徒にとって大いに勉強になります。刺激を受けて、自分のものに



広島県立庄原実業高等学校。
県北部の自然豊かな場所にある



八幡茂見校長。今年度就任2年目。
「農業高校は初めてですが、庄原を拠点とした実業教育に力を入れていきたい」と意気込みは十分だ

学校設定科目「地域農業探究」。
フィールドリサーチを通して生徒
たちは庄原を知り、理解を深める



(左から)生活科学科3年生の横屋操さん、
深井美結莉さん。来客にお茶を出したり、応
接室に通すなど、来客応対も完璧にこなせる
ようになった

サービス接遇検定
の指導に当たる山岡
由美先生。今年度か
ら後輩に指導をバト
ンタッチするが、今
後も生徒の心強い
味方だ



成についてこう話す。
「本校のスローガンである『力耕不吾欺』。こ
れは、力を込めて田畑を耕せば、実りは耕した
人を欺かないという意味です。力を尽くせば望
み通りの結果が出せる。努力は人を裏切らない
ということを、折に触れて生徒に伝えていま
す。どの学科でも、地域で活躍する人と接する機会

は多く、努力して結果を出している方々に出会
い触れ合うことが、庄原の未来を切り拓く人材
育成につながります。生徒には全力で努力し、
立ち向かってほしい。」

必ず生徒の力になる！と 信じて熱く指導

地域と連携して特色ある教育活動を展開する
同校では、資格や検定の取得にも積極的に取り
組んでいる。学科によって挑戦できる資格や検
定は異なるが、専門的なスキルを習得するこ
とが大きな狙いだ。

ここからは、サービス接遇検定を指導に取り
入れている生活科学科の取り組みを紹介しよう。
同科は、生活文化類型と生活福祉類型に分か
れる。生活文化類型では、衣・食・住などの生活
環境と生活文化に関する知識と技術を学ぶ。生
活福祉類型では、看護・福祉・保育などの生活福
祉に関する知識と技術について学ぶ。

「調理・被服・住居・看護・福祉・保育・マナー
など、将来どのような場面でも生かすことがで
きる専門知識を習得することを目指していま
す。ヒューマンサービスの分野で活躍するプロ
フェッショナルの育成が目的です」と話すのは
同科の山岡由美先生だ。

卒業後は専門学校に進学する生徒が多い。3
年間で習得したスキルをさらに深め、専門性の
高い職業に就くことを目標としている。

「もちろん大学や地元のホテル、J A、郵便局

などに就職する生徒もいます。『庄原実業高校
の卒業生なら安心』と言っていただけけるよう
、どのような業種や場面でも役立つスキルが習得
できる資格や検定を導入し、指導しています」。

同科の目標資格一覧には、サービス接遇検定
と秘書検定が入っている。とりわけサービス接
遇検定の指導に力を入れており、十数年前から
継続的に受験している。

「以前は3年生の『課題研究』でサービス接遇
検定3級を受験させていたのですが、それでは
遅いということに気が付きました。そこで1年
生の『生活科学基礎』という科目で、6月にサー
ビス接遇検定3級に挑戦させ、11月に2級に挑
戦させることにしました。3級から受験させて
いるのは、やはり基本をきちんと身に付けてほ
しいから。2級とリンクする内容もあります
し、3級に合格したことを自信にして、次のレ
ベルに挑戦してもらいたいと考えています」。

指導はテキストと過去問題集の他に、山岡先
生が作成したオリジナルの資料をもとに進めて
いる。試験日が近づくにつれて放課後に補習を行な
うなど、対策は万全だ。

『生活科学基礎』では、サービス接遇検定だけ
でなく、多くの資格や検定に挑戦します。毎週
のように試験を受けることもあるので、生徒は大
変です。挑戦を繰り返す生徒たちが合格でき
るように、私たち教職員は指導に工夫を凝らす
必要があります」と山岡先生は真剣な眼差しで
話し、こう続ける。

最新事情 39 広島県立庄原実業高等学校

「中学校を卒業したばかりの生徒に、検定の内容を指導するのは簡単なことではありません。それでも長年、指導を続けているのは、教えたことが必ず生徒の力になると信じているからです。習得したことを日々の生活の中で生かしていくってほしいと思います」。

立ち居振る舞いや言葉遣いは、日常で意識して身に付ける

同校は平成28年度、初めてサービスマテュア検定団体優秀賞を受賞した。指導者の熱意と、生徒の努力が合致した結果だろう。さらに、サービスマテュア検定準1級に合格した生活科学科3年生の二人が優秀賞を受賞した。

「団体優秀賞の受賞と、個人で優秀賞の受賞。本当に喜ばしいことです。24名の生徒が準1級に挑戦し、全員合格することができました。頑張った生徒たちを褒めたいです」と山岡先生は満面の笑みを見せる。

サービスマテュア検定準1級は、3級と2級に合格した生徒の中から希望者のみが受験するため、指導は放課後だ。

「入室からお辞儀、立ち居振る舞い、言葉遣いまで細かく指導しています。外部講師にも入っていただき、昨年度は12名ずつ2クラスに分けて行いました。レプリカの野菜を用意し、野菜を薦めるときはポイントや声の出し方、姿勢、表情など、本番さながらの練習ができたことが功を奏したと思います。生徒たちは一生懸命努

力していました」(山岡先生)。

個人で優秀賞を受賞した二人に話を聞いた。生活科学科3年生の深井美結莉さんと、横屋操さん。二人は1年生の6月に3級に、11月に2級に合格。2年生の7月に準1級に合格した。「サービスマテュア検定を初めて学んだとき、『かっこいい!』と思いました」という深井さんの検定に対する印象が興味深い。

「クレームや苦情にきちんと対応するスタッフの姿や、お客さまの要望に応え、気配りをする姿が魅力的だったのです。こうなりたいと思えたことが、勉強のモチベーションにつながったと思います」(深井さん)。

3級から順調に合格した二人だが、難しいと感じた部分はなかったのだろうか。横屋さんは「2級は、やはり3級よりも難しかったです。記述式の問題では、お客さまへ出す手紙が印象に残っています。自宅で問題集を解き、書いては覚える作業を繰り返しました」と振り返る。

続く準1級は面接試験。庄原市から、試験会場がある広島市内までは数時間かかる。到着後に着替えたり準備する時間がないため、自宅できちんと身だしなみを整えてから出発した。

「身だしなみも大切と教わっていたので、制服にシワがないか、髪型は乱れていないかと心配になり、なかなか家から出られなかったのをよく覚えています」とほほえましいエピソードを深井さんは聞かせてくれた。

横屋さんは「滑舌に自信がなかったので、自

宅で滑舌と発声練習を繰り返しました。扉を開けるときは『失礼いたします』『ありがとうございました』と言ったり、日常生活に取り入れて、言い慣れる努力をしました。面接試験では自然に話すことができたと思います」と話す。

真面目にしっかりとした受け答えをする二人。時折見せる飾り気のない笑顔が、感じのよさを醸し出して、すぐにでも社会人として活躍できる立ち居振る舞いを身に付けていた。

「卒業後はもちろん、校外学習などでも勉強したことは役に立ちます。外部の方から『どうして御校の生徒はここまでできるの?』と驚かせることもあるくらいです。合格しても日常で生かせなければ意味がありません。学んだことを生かせば、誰からも可愛がってもらえます。いろいろなことを教わり、吸収しながら、活躍してほしい。全ての教職員の願いです」(山岡先生)。



昨年度、生活科学科ではサービスマテュア検定準1級の合格者が中学生にマナー指導を実施。お辞儀の仕方や立ち居振る舞いなどを指導した。「年齢が近い分、中学生も楽しく指導を受けているように見受けました」(山岡先生)